

中里介山の思いを引き継ぐ



＝ 農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一 ＝

中里介山といっても、今は知る人も少ないであろう。小説「大菩薩峠」の著者である。「大菩薩峠」は1913（大正2）年から新聞連載された、幕末を舞台に剣士・机龍之介が活躍する未完の超長編作品で、ベストセラーとなった。その介山は、晩年まで簡素でストイックな生活を送り、「大菩薩峠」で得た印税は事業につぎ込み、自らは6畳一間の住まいで、菜食中心の粗食であったようだ。キリスト教や社会主義に高い関心を持ち、トルストイの影響を強く受けていたともいわれる。

一方で、39歳のときに児童教育機関「隣人学園」をつくり、45歳のときには塾教育と直耕、すなわち自ら“直接”大地を耕し、自然から“直接”生きる糧を得る暮らしを合一させた「西隣村塾」を、出身地の東京・羽村に開校している。

話は一転するが、筆者は小学校の教員をしていた家内と一緒に山梨市牧丘町で、東京に住む子どもたちを対象とした「農土香（のどか）の田舎体験教室」を開催し、昨年でちょうど20年を迎えた。隔月で年6回、コロナ禍前は1泊2日の合宿で、コロナ禍後は日帰りで、親子で参加してもらう方式で開いてきた。その中心となるイベントの一つが田植えと稲刈りである。筆者自身は田んぼを持たないことから、大菩薩峠の登り口近くにある「洗心道場」が管理する田んぼで、田植えと稲刈りをさせていただいてきた。

洗心道場は、その近くにある温泉旅館「雲峰荘」の社長である林金次さんが中心となり、青梅街道脇を流れる重川の急な谷あいにて、2000年に立ち上げたものである。耕作放棄寸前の生産者から委託を受けた棚田を中心に、林さんを慕う年配者たちが出入りし、それぞれが自発的・自主的に作業に当たり、維持してきた。

洗心道場は、ここでの田植えと稲刈りを子どもや大人、身体障害者も含めて市民に開放しており、われわれも参加させてもらってきた。道場の入り口正面には毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）の石像と合わせ、介山の写真パネルが掲げられている。当初はなぜ、それがあるのか分からなかった。しかし20年1月、林さんが90歳を目前にして突然亡くなられ、林さんが生前によく語り聞かせてくれたことを香典代わりに冊子にまとめようと調べてみて、驚いた（「林金次語録 基本を尊ぶ」〈Kindle〉、聞き取り・整理は筆者）。



洗心道場での稲刈り後の集合写真

介山のまな弟子であった杵木田龍善氏が、「遺髪と遺品を小説『大菩薩峠』のゆかりの地に残してほしい」との介山の遺言に基づき、大菩薩峠に向かい、折よく林さんと出会い、それがきっかけで介山記念館ができ、洗心道場がつくられたという。

洗心道場は若者たちに塾教育を通じ、直耕を実践させようとした介山の強い思いを、林さんが引き継いで実現したものであった。まさに機縁。ささやかではあるが、介山の思いを少しでもつなげていきたいものだ。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

1971年農林中央金庫に入り、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、2013年11月より現職。

〔主な著書〕

「生産消費者が農をひらく」「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上、創森社）「日本農業のランドデザイン」（農山漁村文化協会）など